



HISHIYA

京都 福知山の歴史と未来が交差する宿

菱屋

2020年12月1日（火）オープン



Photo: Yuna Yagi

2020年12月1日（火）、明智光秀が築いた福知山城をとりまく城下町京都府福知山市に、丹波の粋を感じる宿「菱屋」がオープンします。

「菱屋」があるのは菱屋町という16世紀からの城下町の街並みが今も残るエリア。ここで大正時代に建てられた民家を、その面影を残しつつも、旅好きのオーナーが各地を旅する中で感じた現代の宿に求める要素を形にしました。

他の地域にはない福知山ならではの魅力で客人を迎えたいという思いから、福知山や丹波地域ならではの資源と職人が集まりこの宿をつくりあげました。

この土地の文化と風土が4室8名だけの小さな宿には詰まっています。

都会のホテルのような華やかさやサービスはありませんが、丹波・福知山の時間をゆっくりと感じていただければ幸いです。

菱屋 概要

開業日 12月1日（火）

客室数 4室（1室2名）

価格帯 ￥20,000～/1名

住所 〒620-0023 京都府福知山市菱屋52 JR福知山駅から徒歩20分

TEL 0773-45-8232

Web <http://hishiya.kyoto.jp>

運営 有限会社 鳥名子

福知山という土地

日本海に注ぐ由良川の流域に広がる土地として、江戸時代にはこの水運を利用した諸国の産物が往来する内陸交通の要地として栄えてきました。

こうして時を重ねてきた福知山を、旅する人はもちろん、地元の人にも自慢できる場所にしたいと、福知山を再発見する起点として宿を作りました。

大正期の町屋が宿してきた歴史

近隣を流れる由良川は、古くは小倉百人一首*にも詠まれたほど、福知山の人たちの暮らしとともにある大切な存在です。一方で、川筋が細い由良川の度重なる水害に見舞われたこの地域では、氾濫時に屋根裏部屋に避難するための吹き向けを配するなど、自然災害と共存をしていくための先人たちの創意工夫が生んだ住まいの形が根付いています。「菱屋」では、こうした福知山ならではの歴史の名残りを宿しつつ、現代人が求める快適な空間で客人をお迎えます。

*『由良の門を わたる舟人 梶をたえ 行方を知らぬ 恋の道かな』百人一首 曾禰好忠作

温故知新の考えでしつらえられた宿

宿の構成

元の躯体を活かした吹き抜けのホールを中心に、2つのフロアにわたって設けた4つの客室、箱庭、そして別の入り口から入る小さな料理屋*から構成されます。ファサードは周辺の建物に古くから使われてきたベンガラ塗りを採用し、地域の記憶を今に伝えます。エントランスの引き戸を開けると、かつての住まいの様式を残した上りあがりかまち框が客人を迎えます。素足で木肌を感じてもらうために、数奇屋建築に用いられる名栗加工を施した吉野杉の床を敷きました。

*料理屋は、宿泊者以外の方もご利用いただけます。

客室

客室数は4つと少ないながらも、建具などの元の造りを読み解きながら、古きを温ね、新しきを知る温故知新の姿勢で、今の時代にあったしつらえに読み替えました。藍で染めた土壁、錫を混ぜ込んだ和紙、通常外壁に用いる杉皮を使用した内装、丹後檜、丹波漆、福知山藍、黒谷和紙といった、古くから地域の人々の生活を支えてきた資源を用いながら、近郊の職人たちは伝統的な手法と素材を用いながらも、新たな表現方法でそれぞれの部屋を作りました。

素材と職人

福知山は丹波漆や藍の産地として知られています。また、遠方から材料を調達しなくても、周辺地域には長年使われてきた素材とそれらを知り尽くした職人たちが存在するという恵まれた土地です。

地域の資源と職人たちの手を活かすことは、失われつつある伝統技術の伝承につながるるとともに、地域内で持続可能な経済圏をつくることにもなります。

菱屋の思い

多くの地域で課題となっている、古い建物の転用、改修の際にエコシステムを築くことを意識しました。

「菱屋」を訪れ、木肌を足の裏から感じ、和紙の壁に触れたお客さまが、宿を起点に福知山およびその周辺地域が育んできた、多様な素材や手法に興味を持ってくださることを願っています。

設計・インテリア

設計	Fumihiko Sano Studio / 佐野文彦、 高橋向生
庭	庭師松下
建具	Backyard Blacksmith NAO
施工	舟越工務店
木材	桐村製材
和紙	ハタノワタル
照明	ニューライトポタリー
ガラス作品	荒川尚也
丹波漆	山内耕佑 (NPO法人丹波漆) https://www.tanbaurushi.org/

京都 福知山市にある明智光秀が作った城下町の風情を残す通りに建つ、築80年程の古民家をリノベーションするプロジェクト。

この通りはクライアント家族が育った通りだが、近年空家が増えている。クライアントは飲食店を経営しており、遠方から来られたお客様の宿泊先がビジネスホテルしかない事を憂いておられた。

賑わいや風情が失われていく街に何ができるか、を考えた際に、地域の素材や職人のもつ技術、地域文化を活かした宿を作ることとなった。

昔は頻繁に起こった由良川の氾濫に備え屋根裏部屋へ避難できるよう設けられた吹き抜けの意匠はそのままに、受付と階段ホール、4つの客室と小さな飲食店舗を作り、福知山の奥にあった蔵を解体し、広い庭を作った。各部屋には丹波漆や福知山の藍、綾部の手漉き和紙、丹後檜、丹波石など様々な地域の素材を使い、地域の職人たちと作り上げた。

泊まる場所を作ることで空き家が1つ生きた施設となり、訪れたお客さんが街に滞在出来る時間が増え、地域の職人や作家の仕事が生まれ、宿泊することで使われている素材や作品を通して丹波や丹後を知ってもらうことができる。

そうした循環が生まれ続くことで、地域が活性化し、新たな人やものを呼び込むきっかけになればと考えている。

設計 佐野文彦

読者お問合せ先

菱屋

WEB <http://hishiya.kyoto.jp>

TEL 0773-45-8232

掲載に関するお問合せ先

HOW INC. (菱屋 PR SUPPORT)

MAIL pressrelease@how-pr.co.jp

TEL 03-5414-6405

館内の様子



Photo: Yuna Yagi